ジュシェン - マンジュ史箚記（続）

増井　寛也

（3）清・太宗晩年の病状について

太宗ホンタイジ（1592-1643/ 位 1626-1643）が崩御の数年前から宿痾を抱え、たびたび発作に苦しんでいたことは、『太宗実録』からも容易に読み取れる事実である。死に至るまでの経緯に関して、筆者の目睹した範囲では、孫文良・李治亭『清太宗全伝』1983[①]の叙述が最も詳細なので、適宜省略を挿みながら訳出し、その上で筆者が順治初纂満文『太宗実録』から知り得た事実を補足してみたい。

孫・李両氏は主として通行の乾隆三修『太宗実録』に拠りながら、以下のように言う。

> 崇徳八 (1643) 年八月九日、……この日の亥の刻 (午後 9 時～ 11 時)、太宗は南炕上に端坐したまま突然息を引き取った。……関連する清代官撰史書のほとんどは太宗が亡くなった時、「疾無くして終る」と記載する。この種の言い方は生涯の赫赫たる文治武功、死して憾みなしを示すものとして、あたかも事実に即した定論のようである。あにはからんや、他ならぬこの種の記載こそ実際に符合せず、解けない謎を後世に残し、種々の憶測を生んだ。太宗の死は決して「疾無くして終る」ではなかったと認めてよい。事実上は病死であったのに、官撰史書に公的な証拠がないだけである。
>
> 太宗は幼少時から健康で、中年になってやや肥満し、出征時には重い鎧甲を着用するので、彼の乗馬さえ耐えきれなかった。……明白に彼の体質は豊満強壮であり、官撰史書は従来何かの病気に罹っていたと指摘したことがない。……ほぼ崇徳六（1641）年から太宗

はすでに自身の衰えを感じていた。……そのとき、彼はしきりに病み、その病み方は彼が死を口にするのに何も憚るところはない、と考えていたかのようであった。史書によると、太宗は崇徳五年から病気に罹り、同年七月二七日に一回目の「聖躬違和」が現れ、安山（鞍山）温泉に行って静養している。発病してから他界前まで、史書には具体的に何の病気であったのか全然記述せず、ただ「聖躬違和」、「聖躬不豫」と記すのみである。この種の状況が出現したのは、主として以下の数次である。

崇徳六年八月、松山の大戦前夜、太宗は……親征を八月一一日と決定したが、あいにく発病し、三日延期した。患ったのは鼻衄、つまり鼻出血であった。かくも緊張漲るときに、病気のために日延べしたことは、病状の重さを窺わせる。一四日まで延期しても出血は続き、切羽詰って出発したが、あまりに急いだので出血はやまず、三日後やっと好転した。

『太宗実録』崇徳七年一〇月二〇日条に「聖躬違和。大赦を肆（ゆる）む。凡そ重辟及び械繫の人犯は、俱に大清門外に集めしめ、悉く寛釈するを予（ゆる）す」とある。今次の病みようも重く、大赦によって天に平癒を祈求しただけでなく、朝廷の官員らは太宗の政務軽減を建議した。（一二月）二七日、都察院参政の祖可法、張存仁、理事官の雷興が政務軽減を上奏し、……大学士范文程、ヒフェがこの上奏を太宗に転達して、ただちに裁可を得た。太宗が范文程を遣わして、この重要な決定を諸王に通知したが、従来なかったことなので、諸王は一時なすところを知らなかった。……このことが行政機構の重大な改変に関係することは論ずるまでもなく、体調の悪さを余すことなく反映している。この決定があってから、太宗は基本的に日常の政務を引き渡した。病状が実際に重篤で、短期間に好転する可能性がないと見通されていたことが分かる。同年一二月、イェヘ地方に出猟し、開庫爾（カイクル）地方に至って「聖躬違和」のために、そこに滞留せざるを得なかった。……

崇徳八年正月初一日、また「聖躬違和」により群臣慶賀の礼をすら省いた。……三月一七日、「聖躬違和」により、大赦を行い、死罪以下を皆宥した。四月初一日、「聖躬違和」により、連続二日にわたり盛京および国内の各寺廟に祈祷させ、白金を施与した。年初めの数ヶ月以来、「聖躬違和」の頻度が高まっているのは、連続的な発作を物語る。ただ、四月から八月まで確かに数ヶ月の隔たりがあり、これは太宗が長患いの病人ではなかったかのように感じさせる。

問題は太宗の死をそれ以前の「聖躬違和」と截然と切り離せない点にある。「疾無くして終る」というのなら、死亡時点で病気であったことを否定するし、死亡以前にかつて長期の重病に罹患していたことも否認する。太宗は結局何の病気で亡くなったのであろうか。注目に値する手掛かりがあり、ある種の状況を仄めかす。その手掛かりは朝鮮史書の記載であって、太宗の死を「暴逝」と記録している。太宗死後の九月一日、瀋陽館所駐在の文学（官名）李袗が朝鮮本国へ向けた報告で、「清汗、本（＝八）月初九日夜に暴逝す」（『李朝実録』仁祖二一年九月朔）と述べている。確かにこう言うと、「疾無くして終る」と解釈できるし、害に遭って死んだということにするのも可能である。

しかし、朝鮮人は早くから太宗が病人であることを知っていた。たとえば『李朝実録』仁祖二一年四月己巳（崇徳八年四月初六日）条に「清人、世子の館所に言いて、以て皇帝風眩を病むと為し、竹瀝を得んことを願い、且つ名医に見えんことを要む。上、命じて針医柳達、薬医朴頲等を遣わさしむ」という記載がある。太宗がいかなる病気を患い、いかなる治療薬を必要としたのか、朝鮮人には明々白々であった。彼らの記録に按ずるに、太宗は「風眩」を病み、治療薬に「竹瀝」を用いた。竹瀝は化痰・去熱を効能とし、煩悶等の症状を解く薬種であった。太宗は生涯疲労が蓄積し、晩年には諸事繁重となり、加えて宸妃の死と過度の労苦が重なり、情緒は寛がず、必然的に眩暈を生じ、血熱が湧き上がり、頭が朦朧としたであろう。平素

から痰火が重く、容易に中風症と高血圧を引き起こし、にわかに死亡したのである。太宗の患った病いはこの範囲を出ず、かつまた死亡の主因となったはずである。

管葛山人の『山中聞見録』（巻六・崇禎一六年八月辛未）は太宗が「痰疾」を患って死んだと説くが、恐らくは正確ではない。痰はそれ以外の疾病が惹き起こすのであって、単に痰のみが重病を構成することはなく、また人命を奪い去ることもない。太宗は宸妃を想い続けて死んだと考えるものもいる。崇徳六年九月一三日（一八日の誤か）に宸妃が死没してから、太宗は日夜ひたすら想い続け、食事も喉を通らず、「聖躬違和」となり、一度は精神の昏迷を来たしたことさえあった（王先謙『東華録』崇徳六年九月丙申）。しかし、宸妃を失った悲しみだけが太宗を死に導いたはずはない。宸妃の亡くなる前から、太宗は病んでおり、彼の命を葬り去ったのは恐らく多くの要因の併発、特に中風だったであろう。太宗は生涯政務に精励し、戦陣に奮闘し、軍国の諸大事を人任せにしなかった。長期にわたり極度の緊張状態に置かれたために、健康を著しく損ない、疲労の蓄積は病気となり、病兆は頻々と現れた。わけても宸妃の死に遭遇して悲痛はやまず、一層身体の負担を増大させた。潜伏していた重病が一旦突発するや、たちまち太宗の旺盛な生命力を奪い去ったのである。

（　）内は引用者の補足

見るごとく、太宗の病状・死因が詳述されていて、最終的に中風と高血圧が惹起した脳卒中によって死亡したという見解に関して、筆者が補足すべき事項はないようである。ただ、下記の〔太宗発病関連年表〕に照らして、いくつか蛇足を付け加える余地もあると考える。まず第一に、乾隆三修『太宗実録』が「聖躬違和」・「聖躬不豫」とする記述（〔年表〕№. 6・9・17・37・38・40・42・44）を順治初纂漢文『太宗実録』に即して確認すると、両者とも多くは一致し、同満文本も beye elhe akû［elhekû］（身体安らかならず）と記す。一方、〔年表〕№. 38・42 の二個所は「風疾

作、不豫/edun dekdefi beye elhe akû」、「聖躬違和/edun dekdefi nimere（de）」に作り、太宗の周辺が疾病の原因を「風疾が作(おこ)って病む/edun dekdefi nimembi」ためと考えていたことが判明する。edun dekde-とは通常「冒風」（貴人が風邪をひくこと）を意味するけれども、[2] まさか感冒のために政務を皇室諸王に代行させたり、平癒を祈願して大赦を発令するはずもないので、別種の症状を想定すべきであろう。

「風edun」を動詞化したedulembiを要素とする他の満文語彙に、edulehe nimeku（「痰火病」）とedulehebi（「中風」［半身不随になった］）があり、[3] 中国医学における「痰火病」・「中風」との関連が当面疑われる。いま、中国医学書の集大成とも評される『御纂医宗金鑑』（乾隆一四年［1749］勅撰）[4] を見ると、同書巻三九・「編輯雑病心法要訣」中風総括に以下の記事がある。

> 風従外中傷肢体。痰火内発病心官。体傷不仁与不用。心病神昏不言語。……〔註〕風謂虚邪賊風従外而中、傷人四肢躯体。故曰中風。痰火謂痰火従内而発、病人心主之官。故曰痰火。体中風邪、軽則頑麻不仁、重則癱瘓不用。心病痰火、軽則舌強難語、重則痰壅神昏。……
> ※賊風＝すきま風；頑麻不仁＝手足のしびれ；癱瘓＝しびれる；痰壅＝痰のために気絶する

これによると、中風は内外二種類の要因から発病するとされ、外因としての「虚邪賊風」に中れば「人の四肢躯体を傷つけ」、内因としての「痰火」が発すれば「人の心主之官を病ましめ」たという。どうやら外因性のものが半身不随など重い後遺症を引き起こす脳卒中であり、内因性のものは意識・言語の障害を伴うと認識されたようである。太宗は崇徳五年七月に発症してから同八年八月の他界に至るまで、合計八度もの「聖躬違和」、つまり発作を起こしているが、最後の発作が直接の死因となった脳卒中であったとしても、先行の七次についてはその可能性は低い。というのも、崇徳六年一〇月と一一月には諸王が二度も太宗に気晴らし

の出猟を勧めているし、翌七年の二月と一二月には実際に囲猟を挙行しているからである。わけても崇徳七年一二月の出猟は、二ヶ月前に大赦を発令するほどの容態に陥った直後の行動であった。肢体に卒中起因の麻痺が残っていたとは到底思えない。朝鮮官員が瀋陽館所から本国に向けた『瀋陽状啓』などの報告を見ても、太宗が麻痺を患っていたという記載は見当たらない。

むしろ朝鮮側の記録で注目すべきは、早くは鴛淵一氏が指摘し[⑤]、上引『清太宗全伝』でも触れられているように、清朝が太宗のために朝鮮にしばしば「竹瀝」という医薬、もしくはその原料となる竹の発送を命じたという事実である（〔年表〕①-⑧参照）。この竹瀝（淡竹瀝：青竹を炙って抽出した油液）とは「特に卒中風・熱病・咳嗽・口渇・風気等に用いられたものであり、かなり難病の特効薬であった[⑥]」という。太宗の具体的な症状に関しても、朝鮮史料は「風眩（めまい）」（〔年表〕№43・45）と発言する。ただし、それがいかなる病名を示唆するかについて、鴛淵氏は「議論の余地がある」として慎重に断定を避けている[⑦]。筆者にしても成案があるわけではないが、試みに私見を示しておく。

前掲の『御纂医宗金鑑』巻三九によると、「中風」治療薬の一つとして「清熱化痰湯」を挙げ、以下のように説く。

> 清熱化痰。治内発、神短忽忽、語失常、頭眩脚軟。六君・麦・芩・連・菖・葛・枳・竹・星・香。〔註〕治内発、謂痰火内発之病也。此病之来、必有先兆。如神短忽忽、言語失常、上盛下虚、頭眩脚軟、皆痰火内発之先兆也。宜用此湯。即人参・白朮・茯苓・甘草・橘紅・半夏・麦冬・黄芩・黄連・石菖蒲・枳実・竹茹・南星・木香也。

「痰火」内発の「先兆」には「神短忽忽、言語失常、上盛下虚、頭眩脚軟」があり、その治療に用いる清熱化痰湯の薬材に「竹茹」（青皮を取り去った竹肉から製した薬、淡竹茹ともいう）が含まれている。竹茹は竹瀝と同じく「清熱化痰」（熱をさげ、痰をなめらかにする）を第一の効能とするので[⑧]、

太宗を悩ませた「風眩」の発作とはこの種の頭眩と解してよいのではあるまいか。[9]

〔太宗発病関連年表〕

№.	年次	月	日／干支		太宗関連事項（明記がない限り、出典は『太宗実録』）
1	崇徳２	7	8	甲戌	関雎宮宸妃、皇八子を出産
2			9	乙亥	前夜の夢見を文臣に問い、「常の貴徴 amba wesihun には非ず」との返答あり
3			16	壬午	皇八子の誕生を祝い、大赦を下命
4	崇徳３	正	28	壬辰	皇八子が「薨る bederehe」
5	崇徳５	7	3	庚辰	朝鮮に竹瀝・青竹を要請①（矢の催促）※１
6			27	丙午	「聖躬違和 /beye elhekû」※２により安山温泉に静養に向かう
7		9	2	庚辰	「聖躬稍安 beye majige yebe」
8		10	13	庚申	朝鮮に竹瀝・竹を要請②
9		11	9	丙戌	「聖躬違和 /beye elhe akû」
10		12	15	辛酉	朝鮮に青大竹を要請③
11	崇徳６	8	11	甲寅	松山・錦州へ親征を決意、「鼻衂 /oforoi senggi」により三日間延期するもなお止まず、結局 15 日（戊午）に出征
12			19	壬戌	松山に到着布陣、その途上三日間にわたり「鼻衂不止 /oforoi senggi jing eyeci be iliraků」（eyeci be ＝ eyecibe）
13		9	12	乙酉	宸妃病むの飛報、松山・錦州に届く
14			13	丙戌	盛京へ帰還すべく出発、帰途を急ぐ
15			17	庚寅	途上、宸妃危篤の報に接し、ただちに起営
16			18	辛卯	宸妃の容態を問うべくヒフェとガリンを盛京に急派するも、到着した五鼓の時点で、すでに宸妃は死去（bederehebi）○同日卯の刻、太宗が盛京に到着○宸妃の殯所を盛京地載門外五里に設ける
17			23	丙申	悲嘆慟哭のあまり六日間飲食せず、「聖躬違和」
18			29	壬寅	宸妃の初祭（初七日）
19		10	2	甲辰	諸王・福金・公主らが宸妃の供養を請うも謝絶
20			7	己酉	朝鮮に大竹・中生竹を要請④
21			13	乙卯	諸王・貝勒ら、太宗に気晴らしの囲猟を勧める
22			18	庚申	宸妃の最初の「月祭」
23			27	己巳	宸妃を敏恵恭和元妃に追封（以下、元妃）
24		11	11	癸未	朝鮮に青竹を要請⑤

25			13	乙酉	諸王・貝勒ら、太宗に気晴らしの囲猟を勧める
26			17	己丑	元妃の「月祭」
27		12	13	甲寅	元妃の「月祭」
28			27	戊辰	元妃の「大祭」
29	崇徳 7	正	朔	辛未	元妃への服喪により、元旦の朝賀・筵宴・楽舞を停止
30			18	戊子	元妃の「月祭」
31			28	戊戌	朝鮮に生薑・青竹を要請⑥
32		2	3	癸卯	22 日までイェヘ地方に出猟、往返に元妃の殯所に立ち寄る
33			18	戊午	元妃の「月祭」
34		4	18	丁巳	元妃の「月祭」
35		9	14	辛巳	朝鮮に竹瀝・生薑・旗竹を要請⑦
36			18	乙酉	元妃の「小祥」（一周忌）
37		10	20	丁巳	「聖躬違和」（不豫/beye elheků）により大赦を下命
38		12	12	丁丑	カイクル地方に出猟、「聖躬違和」（風疾作、不豫/edun dekdefi beye elhe aků）により狩猟を中止、盛京へ帰還
39			27	甲子	都察院参政祖可法らが静養を進言、これを容れて政務を皇族の和碩親王ジルガラン・ドルゴン・ホォゲ、多羅郡王アジゲらに委任
40	崇徳 8	正	朔	丙申	「聖躬違和 beye elheků」により、群臣に慶賀の礼を免除
41		2	10	甲戌	元妃を葬る
42		3	17	庚戌	「聖躬違和/edun dekdefi nimere de」により大赦を発令
43			28	辛酉	「風眩」治療のため、朝鮮に竹瀝を要請（『瀋陽状啓』）⑧
44		4	朔	甲子	「聖躬違和」（不豫/beye elhe aků）により寺廟に加持祈祷を命ず
45			6	己巳	「風眩」治療のため、朝鮮に竹瀝、ならびに名医・鍼医を要請（『李朝実録』）
46		8	9	庚午	太宗崩御す（han urihe）

※ 1. ①～⑧は鴛淵一「『瀋陽状啓』の史料的価値の一斑」から補足した竹瀝関連記事である。

※ 2.「　」は乾隆三修本『太宗実録』、続く（　）は順治初纂漢文・満文本『太宗実録』の記載。乾隆三修本と順治初纂本の漢文が共通する場合、後者は省略。下線は満文との直接対応部分を示す。

ところで、前後の事情を勘案すると、太宗の発作が崇徳五年から始まったのにはしかるべき理由がありそうである。上掲〔年表〕を見ると、崇徳二年七月八日に最愛の関雎宮宸妃ボルジギット氏が皇八子を出産し、太宗は幸福に包まれた。その夜、三層の雲を貫いて晴れ上がった天を夢に見た太宗は、翌日文臣にその意味を問い、文臣は「必ず大貴 amba wesihun がある」と答えた。「大貴」が皇八子絡みの発言であることは疑いを容れないであろう。皇八子を後嗣に立てる意向さえあった太宗は、歓喜のあまり大赦を発令したのであるが、[10] 期待も空しく翌年正月、皇八子はわずか七ヶ月で世を去った。命名に至らぬほどの嬰児であったにもかかわらず、その死去を「薨 bederehe」と表現したところに、太宗の深い失意が察せられる。[11] この悲運に追い打ちをかけたのが、宸妃の病死（崇徳六年九月一八日）であった。このときの悲嘆それ自体は乾隆三修『太宗実録』からも窺い得るにせよ、内容の平明さと具体性において順治初纂満文本に遠く及ばない。以下、太宗が宸妃の発病を知ってから初祭（初七日）の供養を挙行するまでを、原文（ローマ字転写）と和訳によって示し、太宗の悲嘆がいかに深甚なものであったか、改めて探ってみよう。

○juwan juwe de mukden hecen ci manduri, mucengge se jifi
（九月）十二日に 盛 京 城 から マンドゥリ, ムチェンゲらが来て
dergi hůwaliyasun doronggo booi hanciki amba fujin beye elhe aků
関 雎 宮 宸 妃 の体調がすぐれない
seme wesimbuhe manggi , ...han juwan ilan de šun tucime
と 上 奏 し た の で, ……ハンは 十 三 日 の 夜明けに
mukden hecen i baru jurafi erde jurame yamji ebume jihei,
盛京城に向かって出発し，早朝に発ち晩遅く宿営しつつ来もって，
juwan nadan de fe jase de isinjifi deduki seme ing iliha. tere yamji
十 七 日 に 旧辺に 至って 休もうと 立営した。その夜，
tanggů ging forire erin de boo ci niyalma jifi hanciki amba fujin i
明けの鐘が鳴る時刻に国もとから使者が来て 宸 妃 の

nimerengge ulhiyen i ujelehebi seme wesimbuhe manggi,
病いが 次第に重くなっていると上奏した ので,
enduringge han uthai juraha. aliha bithei da hife, garin, meiren
聖 ハ ン は ただちに出発した。大学士 ヒフェ，ガリン，梅勒
janggin lensenggi, mujilen bahabukû sonin se be juleri ebšeme
章京レンセンギ， 啓 心 郎 ソニン らを先に 急
genefi, fujin i nimere be tuwafi amasi alanju seme takûraha.
行して 妃 の 病状 を 見て 回 報 せ よ と 遣わした。
hife, garin, lensenggi, sonin se ebšeme jifi sunja ging de isinjifi
ヒフェ，ガリン，レンセンギ，ソニンらは急行し五更に到着した。
lensenggi, sonin daicing duka be dosifi dorgi duka be su seme
レンセンギ, ソニンは大 清 門を入り，内 門 を 開けよ と
hûlara de hanciki amba fujin bederehebi. gûsin ilan se bihe.
呼ばわるとき，宸 妃 は 薨じていた。三十三 歳であった。
lensenggi, sonin amasi uthai wesimbume geneci enduringgе han
レンセンギ, ソニンがすぐ上奏しに引き返すと 聖 ハ ン が
siranduhai jidere be jugûn de acafi hanciki amba fujin bederehe
後を追いつつ来るのに途中で出会い， 宸 妃 が薨じた
mejige be wesimbuha manggi, han gosiholome songgome jifi
知らせ を 上 奏 し た ので, ハンは 慟 哭 し つ つ 来て
mukden hecen de gûlmahûn erin de isinjifi, dergi hûwaliyasun
盛 京 城 に 卯 の 刻に 到着し， 関
doronggo boo de dosifi, fujin i giran de acafi jing gosiholome
雎 宮 に 入り，妃の亡骸に対面してひたすら 慟
songgome nakarakû, geren wang, dergi ambasa, enduringgei
哭して やまず， 衆 王 と 内 大 臣 らは 聖 上が
edun i nimeku aššarahû seme jobome dahûn dahûn i tafuraci han
風 疾を 発症しはしまいか と 憂慮し，再 三 諫 め ても ハンは

umai gisun gaihakû. wang se ci fusihûn gurun i gungju, hošoi
全然聞き入れなかった。王ら　以　下，固　倫　公　主，和碩
fujin, hošoi gungjuse, doroi fujin doroi gege se ci fusihûn, meiren
福晋，和碩公主，多羅福晋，多羅格格ら　以　下，梅勒
janggin i sargata ci wesihun isaha. gulu hashan icehe tetun de
章京　の妻ら　以上が集合した。無地の金黄色に染めた柩 に
hacin hacin i okto feijin acabume muduri funghûwang nirufi,
種々の顔料　金箔を　取り混ぜ　龍　と　鳳　凰　を描き，
gecuheri juwangduwan uheri nadan jergi hašafi, yaya hacin i
蟒緞と　粧緞で　あわせて 七 重 に 囲み，各　種　の
faidan faidafi dergi ashan i duka be tucibufi mukden hecen i amargi
儀仗を列ねて 東の 側　門　を　出て　盛　京　城　の北の
nai tukiyehe dukai tule sunja bai dubede sindaha. beneme genere
地　載　門　の 外，五 里 の 先 に 殯した。柩を送って行く
de, endurigge han, geren wang se ci fusihûn, nirui janggin ci
とき，聖　ハン，衆　王　ら　以下，牛彔　章京
wesihun, gurun i gungju, hošoi fujin, hošoi gunju se, doroi fujin,
以 上，固倫　公主，和碩　福晋，和碩　公主 ら，多羅福晋，
doroi gege se ci fusihûn, meiren janggin i sargata ci wesihun genefi,
多羅 格格 ら 以　下，梅勒 章京　の　妻ら　以上が　赴き，
enduringge han niyakûrafi ilan hûntahan arki hisalafi amasi jihe.
聖　ハ　ンは　跪　き　三 杯の　焼 酎を 灌いで戻って来た。
○orin de uheri be baicara yamun i ashan i amban dzu ko fa, jang
二十日に　都　察　院　参　政　の　祖 可 法，張
dzun žin, icihiyara hafan ma guwe ju, lei sing sei wesimbuhe gisun.
存 仁，理　事　官の馬　国　柱，雷　興らの上奏した　言。
“be gûnici,enduringge han tumen sejen i ejen, dorgi tulergi gubci
「我らの思うに，聖　ハ　ン　は万　乗　の君主で，内 外 の あらゆる

hafan irgen i akdafi banjirengge. enduringge han uttu gosiholome
官民の頼みとして生きる所以である。聖 ハンが かように慟 哭
gasara de, amba ajige hafan irgen gemu elhe aků ohobi. eigen
悲嘆するので，大 小 の 官 民 は皆 不安となっている。 夫
sargan serengge niyalmai amba doro. enduringge han i gosire
婦というものは 人倫の大綱である。 聖 ハ ン の 情
mujilen i udu ilibuci ojorakû bicibe, meni mentuhun i gůnirengge,
愛 がいかに已みがたいとしても，我らの 愚 見 で は，
gosire mujilen be bodoci gasarangge inu , giyan be bodoci jaci
情 愛 を慮れば 悲嘆は当然であれ，条理を慮れば 度が
dabaha. tere anggara abkai kesi de enduringge han abkai fejergi
過ぎる。 いわんや 天恩により 聖 ハンは 天 下
be toktobumbi. tumen irgen be ujimbi. enduringge han i beye de
を 平 定し，万民を養う（べき身）。 聖 ハンの 身体 に
holbobuhangge ujen bime amban kai. cananggi enduringge han
関わることは 重 大 で あるぞ。 先 日 聖 ハ ン が
isiname jakade uthai ferguwecuke gung be mutebumbi. sungsan
到るや否 や，すぐさま驚くべき 戦 功 を 成 し 遂 げ， 松山と
ginjeo be baharangge yasai juleri oho. ere musei gurun i
錦州 の獲 得 は 目 前に迫った。この 我らの 国 が
mukdendere , nikan gurun i efujere ucuri de , enduringge han
勃 興 し ，明 国 が 衰亡する 時機 に， 聖 ハンは
abkai gůnin de acabume beye be karmame gůnici acambi kai.
天 意 を 体 し て 身 を 大 切 に 考えるべきであるぞ。
gosire mujilen de urhufi beye be hairandarakůci ombio?
情 愛 にかまけて身 を 惜しまずしてよかろうか。
ginggulеme wesimbuhe. ”
謹 ん で 上 奏した。」

○orin ilan de,.....enduringge han monggo boo de tefi ninggun
二十三日に, …… 聖　　ハ　ンは 蒙古式天幕に坐して　　六
inenggi otolo jeku jeteraků, muke dulemburaků, dobori inenggi
日　間　，　食事を 摂らず，水　を　口にせず，　昼　夜　を
aků jing songgohai, orin ilan de morin erin ome han i dolo waka
問わずひたすら慟哭したまま, 二十三日午の刻になってハンは心が乱れ
ofi ineku gisun be dahime balai gisurehe. gurun ejen fujin, dorgi
て同じことばを　繰り返し譫言(うわごと)をいった。　皇　　后，　宮
fujisa, geren wang, ambasa ambula golofi weceku de niyalma,
妃ら，　衆 王，　大臣らは甚だ 驚き，　家内神に　人，
morin, ihan, aisin, menggun, suje ulin etuku sindafi hengkileme
馬，　牛，　金，　銀，　緞布，　財物，衣服を　供えて　叩頭し
baiha. coko erin ome, han teni dolo same ofi buda majige
祈った。酉の刻になってハンはやっと心が覚めて，　粥を　少し
ukšeme, cai majige omiha. geren wang, ambasa, han i neneme
啜り，　茶を少し　飲んだ。　衆　　王，大臣らが，　ハンが先に
balai gisurehe be fonjici, han gemu sarků sembi. han ini neneme
譫言をいったのを尋ねても, ハンは全然知らぬという。ハンは先に
gasaha ambula be aliyame hendume, “bi ama taidzu urihe de
悲嘆し過ぎたのを 悔んで言うには,「我は父太祖が崩じた時で
hono ere gese gasahaků. mimbe abkai banjibuhangge ere emu
すら, かくも悲嘆しなかった。我を天が生まれさせたのは　この一
gurun irgen be ujikini, doro be dasakini seme banjibuha dere.
国の民を養うように，政を治めるようにと生まれさせたのであろう。
ere emu hehe i jalin banjibuhabio? bi ubabe gemu sahabi. tuttu
この一婦人ゆえに生まれさせたのか。我はここを皆理解した。さよう
sacibe, mini beye be bi sartabume nakabume gamaci umai ojoraků
理解したとて，自分をぐずぐず惑わせるのを　全然　やめられない

kai. ainara mini asuru gasara ambula be safi, abka, weceku
ぞ。どうしよう。我のあまりに 激しい悲嘆を知って，天と 家内神が
ulhibuhe aise. mini beye be bi jobobuha ” sehe. geren gemu
戒めたのであろうか。我が身を我は苦しめた」といった。衆人は皆
enduringgei hese inu seme jabuha. tuttu bicibe, han gasara
聖 上 の 仰せの とおりと答えた。 とはいえ， ハンが悲嘆し
songgorongge majige hono ebereraků.
哭泣することは 些か も 減じなかった。

○orin uyun de, waliyara yaya hacin i jaka be dagilafi, enduringge
二十九日に， 霊前に供える 諸種の物を 整えて， 聖
han wang se ci fusihůn nirui jangin ci wesihun, gurun i gungju,
ハン，王 ら 以 下， 牛彔 章京 以 上， 固倫 公主，
hošoi fujin, hošoi gungju se, doroi fujin, doroi gege se ci fusihůn,
和碩福晋， 和碩公主ら， 多羅福晋， 多羅 格格ら 以 下，
meiren janggin i sargata ci wesihun genefi waliyara de, enduringge
梅 勒 章京の 妻ら 以上が 往って 祭る とき， 聖
han niyakůrafi arki hisalara de wang se ci fusihůn geren hafasa
ハンが 跪いて 焼酎を 灌ぐ際に 王ら 以 下， 衆 官 人 は
niyakůrahai ilan jergi hengkilehe. amba janggin ci wesihun
跪いたまま 三 度 叩頭した。 昂 邦 章 京 以 上 は
emte jergi arki gilehe. tere waliyara de hůlara bithe i gisun.
二人一組で各一度焼酎を灌いだ。その祭るときに宣読した祝文の言。
‘wesihun erdemungge ningguci aniya uyun biyai ice de
「崇 徳 六 年 九 月 朔
niowanggiyan indahůn, orin nadan de šanggiyan singgeri inenggi,
甲 戌， 二 十 七 日 庚 子 の 日 ，
enduringge han i hese. “hůwaliyasun doronggo booi hanciki amba
聖 ハン の 勅旨。『 関 雎 宮 宸

fujin si sohon coko aniya banjiha bihe. gůsin ilan se de šahůn
妃よ, 汝は己　酉 の年に 生 ま れ た 。三十三歳のとき　辛
meihe aniya, uyun biyai juwan jakůn de julgan i bederehe. si minde
巳 の 年　九　月　十　八　日　天寿をもって薨じた。汝は我に
ucarafi , bi simbe dabali jiramin gosime jing banjiki sere de,
邂逅し，我は汝を 特に 篤く 愛し つねにともに居たいと思ったのに,
kesi aků aldasi delgehe. bi simbe neneme gosiha ambula be
不幸にも半途に別離した。 我は 汝を生前　深く　愛した
dahame bedereci be onggoro mujilen aků akame nasame ofi,
ので，薨じたとて　忘　れ　難　く　，嘆き惜しむ ので,
amcame gosime yaya hacin i jaka be yooni dagilafi hiyoošun
追　慕　して　諸種の　も　の　を　すべて 整えて　衷　心を
isibumbi. geli lama, hůwašan, doose be baifi, simbe sain bade
致す。　またラマ，　僧侶，　道士に請うて，　汝が　福地に
banjinakini seme ging ni bithe hůlabume baimbi."' bithe hůlara
生まれ変わるようにと経文　を誦ませて　祈る。』」祝文を宣読する
de wang geren hafasa gemu niyakůraha hengkileheků. tere
とき王と　衆　官人は皆　跪いたが，叩頭はしなかった。その
waliyara de fujin i fayangga be sain bade banjibu seme lama,
祭 る と き，妃の　霊　を　福 地に 生まれさせよと ラマ,
hůwašan, doose be ging ni bithe hůlabume baiha. wajiha manggi
僧 侶，　道士　に　経　文を　誦ませて祈った。 祭り終えた後,
enduringge han,wang, beile, beise geren amasi jihe.
聖　ハ　ン，王，　貝勒，　貝 子，衆人は戻って来た。

「我は父太祖が崩じた時ですら、かくも悲嘆しなかった」とは、何とまた率直で大胆な告白であろうか。初祭の情景は朝鮮側の『瀋陽状啓』辛巳（崇徳六）年一〇月初二日条も、

（九月）二十九日、聚会僧道之流、皇帝与諸王親往完斂。所謂完斂者、謂道者誦経設神祀之事也。皇帝大加悲慟、至於路上、亦哭泣不止為白斉。（下線は吏読、敬語「〜せらる」の意）

と記し、『太宗実録』の記載を裏づける。また、『太宗実録』が宸妃の一周忌に至るまで月命日の供養（月祭[12]）を一再ならず記録する（〔年表〕参照）のも、追慕の念をよく物語る。

最愛の妃であっただけに「宸妃病む」の報に接した太宗の動揺は尋常ではなく、松山の陣中から盛京城に急行するや、「妃の亡骸に対面してひたすら慟哭してやまず、衆王と内大臣らは聖上が風疾を発症しはしまいか edun i nimeku aššarahů と憂慮し、再三諫めてもハンは全然聞き入れ」ようとはしなかった。順治初纂本漢文はこの部分を「入東宮柩前、慟哭不已。諸王・内大臣屡勧恐傷聖体。上不允」と記すだけであるが、事態ははるかに深刻であった。これより先、鼻血（恐らく高血圧が原因）のために松山親征を延期したのみか、行軍中も碗に受けるほどの鼻血が三日も続いたという。そこへ宸妃の死が重なり、慟哭の激しさは諸王・内大臣が「風疾 edun i nimeku」の発作を危惧するほどであった。痰火病がすでに持病と認知されていたことが分かる。

太宗は六日間、絶食して昼夜を分かたず慟哭し続けた結果、午の刻（正午頃）から酉の刻（午後６時頃）にかけて「心が乱れて同じことばを繰り返し譫言（うわごと）をいった dolo waka ofi ineku gisun be dahime balai gisurehe」（漢文「昏迷、言語顛倒[13]」）という。人事不省に陥ったことは明白である。今回の発作は周囲を驚愕させるほど重いもので、「皇后、宮妃ら、衆王は甚だ驚き家内神 weceku に人、馬、牛、金、銀、緞布、財物、衣服を供えて叩頭し祈」り、錯乱から覚醒した太宗自身も「あまりに激しい悲嘆を知って、天と家内神 weceku が戒めたのではないか」と反省している。

注目すべきは、この家内神 weceku とそれに対する祭祀である。『御製増訂清文鑑』は weceku を簡略に「神祇」（家に祭祀する神 enduri[14]）と解説するに過ぎない。よって、『満洲祭神祭天典礼』（乾隆一二年［1747］）

巻頭に収める乾隆帝の満文上諭に示唆を求めると

> 我らマンジュ人 manjusa は本性が恭謹誠実であり、思いは真摯なので、天・仏・神を恭しく祭祀し、祭神、祭天の儀礼をきわめて重視してきた。各姓のマンジュ人は各々土地の儀礼に従い、祭神、祭天、背燈することは少しばかりの違いはあれ、大抵隔たりはさほど遠くなく、互いに皆似ている。我らのギョロ姓 gioroi hala の祭祀は、皇室より以下、王公の家に至るまで、尽く祈祷の祝詞を肝要とする。かつてのサマンら samasa は皆本土生れのもので、幼時からマンジュ語を学ぶ ため、およそ祭神 wecembi, 祭天 metembi, 背燈 tuibumbi, 献神 ulin gidambi, 報祭 uyun jafambi, 求福 hůturi baimbi, 麺猪祭天 suwayan bumbi, 去祟 gasan dulebumbi, 田苗神祭 usin wecembi, 馬神祭 morin i jalin wecembi などの祭祀 wecen に、尽く適切に事柄を斟酌し、吉祥の祝詞を編み祈祷したものであった。……

とある。一読して以下の諸点を理解することができよう。①皇室アイシン＝ギョロ氏をはじめ、マンジュ諸氏族は大同小異の祭祀を挙行し、②その対象が weceku、すなわち天 abka・仏 fucihi・神 enduri であり、③祭祀の対象と様式に応じて祝詞が異なり、④さらに weceku への祭祀儀礼を執行し、その際に祝詞を唱える人物はサマン saman（pl.samasa）と称された。このサマンこそ学術用語としてのシャマン shaman、宗教現象としてのシャマニズム shamanism の一語源とされることは贅言するまでもない。[15]

乾隆帝の上諭に見える祭祀諸形式のうち、太宗発作時のそれに該当するのは metembi（願かけをする）である。『御製増訂清文鑑』は

> 還愿：ulha wame abka wecere be <u>metembi</u> sembi.
> 家畜を屠り　天を　祭るのを　還愿する　という。

と解説し、「還愿」という漢訳をあてる。要は、病気平癒を天神に祈願して皇后・宮妃ら・衆王が「人、馬、牛、金、銀、緞布、財物、衣服を供え」たわけであるが、馬と牛は当然犠牲として屠られたであろう。ならば人はどうなったのか。発作の重さに狼狽した皇后以下が人まで犠牲に加えたというのが最もありそうな解釈であるが、順治初纂本の漢文は明記を避けて「后妃及び衆大臣驚惶し、神前に許願し叩頭して止まず」としか記述しない。

この問題に一石を投ずるのが、談遷『北游録』紀聞下「人祭」であり、

> 満洲始事好殺戮。享神、輒殺遼人代牲。或至数百。今習遂革。
> 満洲、事を始めるに殺戮を好む。神に享（すす）めるに、輒ち遼人を殺して牲に代う。或いは数百に至る。今、習（ならい）遂に革む。

とある。文中の「今」とは談遷が北京に滞在した順治一〇年から一三年頃であるから、[16]「遼人を殺して牲に代」え、「神」wecekuを祀ったのは入関前であったと見て誤りない。この記述が性質上、伝聞情報に属し、また明朝の遺民であった談遷の感情を考慮すると、信憑性に一抹の不安は残るにしても、強いて人牲を疑問視する必要はあるまい。

最後に、太宗没後、国家の柱石として清朝の入関と北京定鼎を成功に導いた摂政王ドルゴン（1612-1650）の持病と死因についても一言しておきたい。というのも、周遠廉・趙世瑜『摂政王多爾袞全伝』1986[17]に、以下のようなくだりがあるからである。

> 彼は年齢は若かったが、身体はずっと不調であった。彼は体格が痩せて細く、体質はやや弱かった。彼自身、「我頗る労心焦思し、親自（みずか）ら堅を披、鋭を執り」、「我の体弱く精疲るるは、亦た此れに由る」（『多爾袞摂政日記』順治二年閏六月一二日）と語っているが、これは松山戦役（崇徳六年八月－翌年二月）の際に生じた病根であった。入関の初めは国家多事の時期であり、ドルゴン自ら「幾（機）務日々繁く

裁応に疲れ、頭は昏み目は脹れ、体中、時に復た快からず」（同上『日記』順治二年閏六月初六日）といっている。さらに、年齢を重ねることにより、事務煩雑に遭遇すると心中に苛立ちを生じた。北京入りの後は「水土調わず、疾と為ること頗る劇し。今は差（やや）健勝なるも、然れども未だ尽くは癒えず」（同上）という状態であり、このため以後奏章は簡にして要を得たものだけを選んで目を通すと下命した。このように見てくると、彼が壮年で死亡したのは軍国の大事に労苦を極めたことと関係がある。清初の多くの人物、ドド、ヨト、ロロホン、サハリヤン、トゥライなども長寿ではなかったが、長年の戦闘・疲労と関係するのであろうか。今は知り得ないが、しかしこの一事だけがドルゴンを死に追いやったのではない。

ドルゴンは明らかに身に纏いつく病魔をもっていた。自ら「素より風疾に嬰（かか）り、労瘁して勝えられず」（『世祖実録』順治三年二月乙酉）と発言しており、かつて政敵のホォゲもドルゴンが「有福の人に非ず、乃ち有疾の人」（同『実録』順治元年四月戊午朔）であって、摂政を最後までやりぬくすべはないといったことさえある。「風疾」とは何か。一つは「狂疾」を指し、瘋癲つまり神経性の疾患である。もう一つは「中風」を指す。……思うに、ドルゴンが恍惚の半狂人であったはずはなく、中風類の脳血管病を病んでいたと認められる。これは摂政としての過重な精神労働、日夜の焦燥と直接の関係がある。「体弱く精疲」れ、「頭は昏み目は脹れ」る自覚症状も皆、脳血管病の発現である。順治四年に至って、王公・大臣も「体に風疾有り、跪拝に勝えず」（同『実録』順治四年一二月丙申）を理由に、ドルゴンに跪拝の礼を免除することを奏請した。もし脳血管硬化の類なら、跪拝のとき頭のふらつきと目まいは避けられず、中風の発症はあり得ることであり、だからこそこのような請願を提出したのである。その他、この病気は日常的に刺激を受けて、怒りや焦りを起こしてはならず、さもなくば病状を重症化させたはずである。……後に外国人宣教師はドルゴンが「大方、狩猟で落馬して死亡したのであろう」と記述

している（A. Väth［魏特］『湯若望伝』）が、ドルゴンが幼少時から馬上の生活を始めたことを思うと、乗馬の技倆は低かろうはずがなく、理由なくして落馬することはない。脳血管病の発作によって頭のふらつきと目まいを起こし、落馬した可能性が高い。

以上見るごとく、ドルゴンも太宗と同様、「風疾」を持病とし、松山戦役あたりから症状を自覚していたようである。風疾を脳血管障害だけに狭く限定してよいものか、疑問は残るものの、太宗死没直後の崇徳八年九月にドルゴンがやはり朝鮮に竹瀝の発送を要求したこと[18]を斟酌すると、中風のなかでも内因性の痰火病と考えられていたのであろう。

注

① 『清太宗全伝』、第六章「愛好和生活」・第四節「清太宗之死」・第一項「突然逝世」（pp. 440-446）。

② 田村実造・今西春秋・佐藤長共編『五体清文鑑訳解 上』1966、№.8442, p. 473。順治初纂満文漢文『太宗実録』崇徳二年六月二七日条に、重臣チェルゲイに関して ‘edun dekdehebi’「風起」（乾隆三修本「風疾」）とあるが、これは感冒に罹ったとの意である。本文後段参照。

③ 『五体清文鑑訳解 上』№.8362・№.8363, p. 468。edulehe は edulembi（名詞 edun に接辞 -le- を付加して動詞化したもの）の過去形 / 過去連体形である。

④ 『欽定四庫全書』子部・医科類所収。『御纂医宗金鑑』の勅撰年次は『四庫全書総目提要』に拠った。『中国医籍大辞典 下』（2002）に「又称《医宗金鑑》。本書由清政府組織編写的大型綜合性医書。共分十五種、内容宏富、上自春秋戦国、下至明清歴代名著之精義、分門別類、刪其駁雑、採其精粋、発其余蘊、補其未備。……」（p. 1506）とある。

⑤ 鴛淵一「『瀋陽状啓』の史料的価値の一斑――特に清太宗と睿親王の身上に関して」（『神田博士還暦記念書誌学論集』1957）pp. 643-654、同「清鮮関係の一齣――竹瀝考」（『東方学』27、1964）pp. 1-11。

⑥ 鴛淵一「清鮮関係の一齣――竹瀝考」p.4 参照。竹瀝の効能については『本草綱目』巻三七・木部・淡竹瀝の「〔主治〕暴中風、風痺、胸中大熱。止煩悶、消渇、労復（別録）。中風失音不語。養血清痰。風痰、虚痰在胸膈、使人癲狂、痰在経絡四肢、及皮裏膜外、非此不達不行（震亨）。……」を参照。

清朝が朝鮮に竹瀝を要求したのは、マンチュリアに竹を産せず、また産地の明と交戦状態にあったからである。マンジュ語には竹にあたる固有語がなく、漢語「竹子」の発音を借用した cuse moo（moo は樹木の意）という合成語が存するに過ぎない。明初の女真語でも事情は同様で、『女真訳語』は竹を「住 ju」と音写する（Gisaburo N. Kiyose, *A Study of the Jurchen Language and Script*, Kyoto, 1977, p. 147）。

なお、入関前段階におけるマンジュ人固有の医学知識や、中国医学からの影響については不詳という他ないが、中国医書の満訳が始まるのは順治年間以降、特に康熙年間のことである（于永敏「中国満文医学訳著考述」『満族研究』1993 年 -2 期、pp. 54-60）。

⑦　鴛淵一「清鮮関係の一齣―竹瀝考」p. 4。同氏は李光濤「多爾袞擁立幼帝始末」（『国立中央研究院院刊』1、1954）の、太宗の死に関する「風眩大約即脳充血、死得倉卒」（p. 41）という主張に言及して、「若し（李）氏の言われる通りであれば」、太宗は脳充血（脳溢血）によって急死したことになるが、そこへ至る数年間の発作は「その前兆としての中風・中気と云ったものであったと云ってもよいかと思う」（鴛淵同上論文 p. 11・注 5）と半ば賛同する。

⑧　竹瀝・竹茹の薬効については江蘇新医学院編『中薬大辞典 上』1977・p. 899・p. 900、陳存仁『図説漢方医薬大辞典 第一巻』1982・pp. 224-227、小学館編（上海科学技術出版社）『中薬大辞典 第三巻』1998・pp. 1572-1573 参照。

⑨　『御纂医宗金鑑』巻三九・「滌痰湯」条にも「滌痰、内発迷心竅、舌強難語、蒲・星。温胆、熱盛、芩・連。入神魂、便閉、滾痰攻。〔註〕内発謂痰火内発、迷人心竅、令人精神恍惚、舌強難語也。滌痰湯、人参・菖蒲・南星、合温胆湯也。温胆湯、橘紅・半夏・茯苓・甘草・竹茹・枳実也。熱盛、加黄芩・黄連。大小二便閉、用礞石滾痰丸、攻之可也」とあって、やはり意識混濁の治療に竹茹が用いられた。

⑩　今西春秋「清の太宗の立太子問題」（『史学研究』7-1、1935）pp. 115-118、前島又次「睿親王多爾滾を中心として見たる清朝初期の継嗣について」（『山下先生還暦記念東洋史論文集』1938）pp. 818-819 参照。

⑪　ただし、『内国史院満文檔案』崇徴三年正月二八日条は単に「亡くなった akû oho」（河内良弘『内国史院満文檔案訳註 崇徴二・三年分』2010・p. 225）と記すのみである。

⑫　順治初纂満文『太宗実録』崇徴六年一〇月一八日条に、最初の月命日が “hanciki amaba fujin i bederehe biya jalundara inenggi dorolome suhe, jiha dejime［deijime］waliyaha”（宸妃が薨じた月の満ちる日［＝月命日］に、

礼を尽して紙元宝・紙銭を焼いて供養した）と見える。

⑬ 乾隆三修『太宗実録』では「昏迷、言語顛倒」の一句は削除されているが、王先謙『東華録』崇徳六年九月丙申条には「忽昏迷、言語無緒」とある。

⑭ 中島幹起編『清代中国語満洲語辞典（電脳処理御製増訂清文鑑）』1999、№10656・p. 591 に ‘boo de wecere juktere enduri be weceku sembi’ とある。

⑮ 学術用語としてのシャマンの語源とそのヨーロッパへの流入に関する詳細は S. M. Shirokogoroff, *Psychomental Complex of the Tungus* , London, 1935, p. 268 を参照。

⑯ 『北游録』紀聞上・紀聞下は、著者談遷が北京に滞在した順治一〇年（1653）一〇月から同一三年（1656）二月にかけての約二年余の見聞を記述する。

⑰ 『摂政王多爾袞全伝』1986、第八章「短暫而声名顕赫的一生」・第四節「身後風雲変幻」・第一項「病魔無情」（pp. 447-448）。

⑱ 前注⑤の鴛淵 1964 年論文 p. 8。

（4）清・太宗の実名に関する一試案

〔アバハイ実名説〕

欧米人の著作には太宗の個人名をアバハイ Abahai と記すものがある。ハンメル A. H. Hammel 編『清代名人伝略』（*Eminent Chinese of the Ch’ing Period*, 1943）がその代表的なもので、巻頭に Abahai を置き、その書き出しに「公式記録には Huang-t’ai-chi 皇太極（Khungtaiji）として知られる」（執筆：房兆楹）とある。また、ハウエル E. Hauer の『満独辞典』（*Handwörterbuch der Mandschusprache*, 1952）にも、Abahai を「ヌルハチの第八男、後の太宗文皇帝」とする。要は公式名のホンタイジに対してアバハイを実名と解するわけであるが、この名称は満文漢文の清朝官撰文献ばかりか、明・朝鮮の史料にも一切出現しないので、それが何を典拠とするのか、かねて疑問視されてきた。この問題の究明を試みたスターリ氏 G. Stary の一連の研究に拠れば、太宗の年号「天聰」abkai sure の abkai が個人名と誤解されたために生じた謬説らしく、[①] まずは穏当な結論と考えてよかろう。ならば、ホンタイジこそが実名に相違ない

かというと、問題はさほど単純ではない。

〔ホンタイジ実名説〕

清朝の公式見解は無論、ホンタイジ hong taiji（皇太極）を太宗の実名とする。順治初纂『太宗実録』の満文および漢文によってこれを示せば、天命一一年九月朔条に太宗のハン即位に関連して以下の記述がある。

文中の（ ）内は筆者の補足である。

> マンジュ manju 国の文臣たちが言うには、「もともと太祖が（嫡子中の）第四子の名をホンタイジ hong taiji となしたことは、或いは天が定めて国にハン han となる命があって、そのようなのであろう。初めマンジュ国は漢人 nikan・モンゴル人 monggo の先例・典籍・儀礼を知らないのであった。太祖自身は必ず国にハンになると、元来まさか思っていたであろうか。彼の後継ぎのこの子がハンとなると見通していたであろうか。後にマンジュ国が興り、典籍・儀礼を学び、太祖がハンとなった後、漢人・モンゴル人の先例を見れば、漢人はハン（皇帝）を継ぐ子を hůwang taidzi（皇太子）という。モンゴル人はハンを継ぐ子を hong taiji という。そのようなので、天が予め定めて符合するようになしたのであろう」と語った。
>
> 識者謂、「太祖名四子為皇太極者。蓋国中原無漢与蒙古書籍。太祖初未嘗有必成帝業之心。亦未嘗有此子可継世為君之心。後国運漸盛、諳習書文。及太祖為汗、閲漢与蒙古書籍。漢之儲君、曰皇太子。蒙古之継世者、曰皇太極。由是観之、天意已預定矣。」

こうしたホンタイジ hong taiji とモンゴル語称号 hong taiji（qong tayiǰi <Ch. 皇太子）との符合を天意に仮託する『実録』の予定説が、太宗のハン位継承を正当化する意図的な付会に発することはすでに指摘されて久しい。ちなみに『実録』は天意を強調すべく、太祖が hong taiji の原義を知らずに命名したとするが、これまた容易に信じ難い。

〔ヘカン実名説〕

『太宗実録』の天意予定説に対して、三田村泰助氏は早くも戦前の段階でヘカン実名説を発表している。氏は太宗の即位事情を詳論するなかで、以下のように説く。[②]

> 然し［太宗の］本当の名は皇太極ではなかつた様である。明の陳仁錫の『山海紀聞』によると「黄旗下是喝竿汗［憨か］、老奴第四子也。老奴死、喝竿立。奴衆称為汗」とある。この通りであれば太宗の本名は皇太極でなくてはママ喝竿 hekan といふ事になる。この事実は先年和田［清］先生から教示されたのであつたが、私は他に証拠がないので少しく疑問を抱いて居たが、今度『李朝仁祖実録』を見ると、太祖の没したときにこの前後の情報を齎した平安監司［平安道観察使］の馳啓がのせてあつて、その文中「奴酋死後、第四子黒還勃烈承襲」と記して居る。黒還勃烈は hekan beile（貝勒）で陳仁錫の記述に合する事になり、太宗の本名は通説の皇太極ではなくてヘカンである事が確かめられた。さうすると皇太極はどうなるか。この名称が当時建州内部で用ゐられて居た事は確かで、朝鮮の記録に洪太主・弘太市・紅歹是と為して居る事によつて知り得る。その故に hung taiji は太宗の通称であつたらうと思ふ。（［　］内は引用者）

この一文に続けてホンタイジが「通称」化した理由を、その生母モンゴジェジェ monggojeje（蒙古姐姐の意）がモンゴル系ジュシェン人の名門イェヘ＝ナラ yehe nara 氏の出身であったため、「蒙古の王子を意味するホンタイジを以て呼び慣はした」ところに求める。結局、三田村説においては、通称としてのホンタイジが太宗のハン即位（1626 年 9 月）以前から、朝鮮にも――サルフ戦役（1619）直後における対朝鮮強硬派の急先鋒として――聞こえるほど広く通用した（下記〔表 I〕参照）ために、むしろ本名のヘカンはその背後に隠れてしまったということになる。

〔表Ⅰ〕朝鮮文献中のホンタイジ

『李朝実録』①光海君 11 年 12 月 17 日丙寅条	1619	洪太時	홍태시
『李朝実録』②光海君 13 年 8 月 28 日丁酉条 / ③ 9 月 9 日丁未条 / ④ 9 月 10 日戊辰条 / ⑤ 9 月 11 日己酉条 / ⑥ 9 月 17 日乙卯条	1621	洪太主	홍태주
李民寏　⑦『柵中日録』己未年 10 月 7 日条	1619	紅歹是	홍대시
李民寏　⑧『建州聞見録』	1619-20	紅歹是	홍대시
李肯翊　⑨『燃藜室記述』己未年 5 月条	1619	洪太市	홍태시
丙寅年 5 月条	1626	洪他時・洪太始	홍타시・홍태시
金宗一　⑩『瀋陽日乗』戊寅年 6 月 30 日条[3]	1638	汗（名弘佗始）	홍타시

しかし、それにしても喝竿・黒還なる名称が明・朝鮮の史料に記録されながら（後掲〔表Ⅱ〕参照）、清朝入関前の根本史料たる『満文原檔』と『満文老檔』に当該語彙がまったく発見されないのは、不可解どころか異様な現象ではあるまいか。この疑惑を一層深めるのが、〔表Ⅰ〕に掲げた用例中の特に④と⑦であって、ともに朝鮮側がマンジュ国 - 後金国内部で直接得た情報である。前者の情報源はサルフ戦後、後金国の動静探査に派遣された満浦僉使鄭忠信の報告であり、「是の行、忠信往返すること月余、二千余里を行く。深く虜穴（当時は遼陽）に入り、虜中の事情を詳探す」とあって、信憑性の低かろうはずはない。[4] 後者はサルフ戦役のさなか、朝鮮軍都元帥姜弘立らとともに後金国に降伏し、木柵内に監禁された従事官李民寏の手記であり、その庚申年（1620）三月初八日条に、

> 奴酋以藩胡仁必・遏道舎・末介等昼夜守直寓所。……（割注：仁必、乃穏城藩胡。能行三年喪、且有功於我国、受職帖者。故慕恋我国之誠、久而不衰。凡虜中所為、尽情密言。）

とある。木柵の守直を命じられた、もと穏城藩胡（藩胡とは豆満江流域原住のワルカ部系ジュシェン人を指し、朝鮮語に習熟した）[5] の仁必から、李民寏は後金国の内情を細大漏らさず聞知していた。かりに太宗がホンタイジ以外にヘカンとも呼称されていたのなら、鄭忠信と李民寏のいずれもが、不

覚にもこの情報を見落したことになる。

三田村説以後、太宗の実名問題はそれ以上深化されることはなかった。ところが、近年、杉山清彦氏は『山海紀聞』・『李朝仁祖実録』以外の諸史料を加えてヘカン実名説を補強する一方、『満文原檔』『満文老檔』未載の一件に関しては「実名の忌避にとどまらず、本名を記録から抹消してしまった（とみられる）」と推論する。[⑥] さらに、ホンタイジという名称に関してはこれを通称ではなく、太祖から授与された公的な称号と解釈し、その授与年代はモンゴルの内ハルハ五部による自らへのクンドゥレン＝ハン kundulen han 号奉呈を機に、太祖が子弟にモンゴル語由来の称号を授与した 1607 年から、hong taiji（hong taiji beile）が史料に初出する 1612 年までのどこかであったと推定する。[⑦] いま、三田村論文所引の史料を含む「喝竿」・「黒還」系統の名称を、杉山氏に依拠して表示すると〔表Ⅱ〕のようになる。表中、明らかに喝竿を誤記した④噶竿と⑤揭竿を除けば、黒還 he-huan・喝竿 he-gan・河干 he-gan の発音はヘカンよりはホガンに近似していたと思われる。[⑧]

〔表Ⅱ〕に照らす限り、太宗の実名＝ヘカン、通称 / 称号＝ホンタイジとする見解は、疑問の余地がないかに見える。もっとも、第一に太祖ヌルハチの子姪にモンゴル風の実名をもつものが間々看取され、[⑨] この範疇からホンタイジだけを除外すべき理由が見当たらない。第二に、qong tayiji/qung tayiji が本来「tayiji（チンギス＝カンとその兄弟の子孫のみによって世襲される称号）に授与された尊称」[⑩] を含意したとしても、『蒙古源流』*Erdeni- yin tobči* の用例を見る限り、これをモンゴル人貴族の称号（個人名を含む付加要素＋ qong tayiji）[⑪] としてではなく、個人名として単独使用した事例は皆無である。『源流』唯一の例外が他ならぬ清・太宗のそれであってみれば、[⑫] この場合のホンタイジは称号ではなく、実名として用いられた可能性が高くなる。第三に、そもそもハン即位前の時期に関して、国内において黒還・喝竿・河干ないし黒還勃烈・河干貝勒を諱避すべき理由が存在せず、しかもこれらに該当する呼称を満文史料から抹消した積極的な形跡も看取されない。

こうして太宗実名問題はいよいよ混迷の度を増すのであるが、行論の便宜上、現在までに判明している事項を整理すると、①太宗がハン即位前からホンタイジと呼称されたこと、②太宗はまた 1612 年に hong taiji (beile) として初見し、天命元年（1616）の四大ベイレ制発足以後は四人中の最年少であるところから、duici beile（第四ベイレ＝四王）と称されたこと、③さらには遅くとも太祖の死去した天命一一年八月には間違いなく黒還勃烈・河干貝勒と称されたこと、この三点に帰着する。即位前の太宗にホンタイジ＝ベイレ・ドゥイチ＝ベイレに加えて、黒還勃烈・河干貝勒の呼称が確実に存在したとすると、なにゆえ黒還・河干に該当する呼称が満文史料に発見されないのか、以下これが議論の焦点となる。

〔表Ⅱ〕「黒還」/「喝竿」名称表（杉山［2015：p. 224・表 4-1］に依拠して改作）

史　　料	年　　次	記　　事
『李朝実録』	①仁祖 4 年（天啓 6 年／ 1626）10 月癸亥	平安監司尹暄馳啓曰、「唐将徐孤臣言、『賊将劉愛塔、開原之人而早年被擄者也。使犍子李姓者、持諺書出送曰、“奴酋死後、第四子黒還勃烈 hei/he-huan bo-lie 承襲。分付先搶江東、以除根本之憂、次犯山海関・寧遠等城 ” 云。』」 ※諺書は諺文（ハングル）の書状と見ておく。
銭謙益『牧斎初学集』巻 47「特進光禄大夫左柱国少師兼太子太師兵部尚書中極殿大学士孫（承宗）公行状」	②天啓 6 年 8 月 ③崇禎 3（1630）年	奴児哈赤死。其四子河干貝勒 he-gan bei-le 立。 奴四酋河干貝勒傾巣入寇。偽二王子安明貝勒居守瀋陽。
談遷『国榷』	④天啓 6 年 9 月 ⑤崇禎 2（1629）年 3 月 ⑥崇禎 3 年 3 月癸卯 ⑦崇禎 14（1641）年 8 月辛酉	奴児哈赤死瀋陽。子噶竿 ga-gan 立。 （是月）寧遠武進士王振遠・陳国威以門生見陳仁錫、曰「……四月間、四憨（四酋？）揭竿 jie-gan 先至。秋冬、諸王子幾支入。必舎遼而攻薊宣。……」 建虜済師万余、入永平。……声言往灤（州）・永（平）、攻大城通州。然喝竿 he-gan 自永平漸治帰計。 建主喝竿以三千騎来援。午刻、拠長嶺山、声言困松山城。

陳仁錫『無夢園初集』「山海紀聞一」紀名号決戦勝	⑧崇禎３年頃 ※の記事により、薊門（の永平等四城）が陥落した崇禎３年頃と推定	一、黄旗下是喝竿憨 he-gan han、老奴第四男也。老奴死、喝竿立。奴衆称為憨 han。偽号後金国皇帝。砍倒黄旗、則喝竿之頸可繋、頭可献。…… ※「今奴一勝而得河東、再勝而掠河西、三勝而躙薊門」（紀名号決戦勝の付記）
茅元儀『督師紀略』巻１	⑨天啓２（1622）年正月	奴酋入（広寧）城。第四子河干貝勒 he-gan bei-le、即今酋也、与其第三兄請曰「……畿東震駭、京師内憂、不乗此長駆、豈以京師華実不如広寧耶。」

さて、筆者が太宗のハン即位前に遡る――もしくは後年、即位前を追想した――満文史料に当ってみたところ、ホンタイジ＝ベイレ・ドゥイチ＝ベイレ以外の言及ないし呼びかけは、「ホォゲ（太宗長子）の父ベイレ」（hooge ama beile）一種しかない事実が判明する。〔表Ⅲ〕に見るごとく、hooge ama beile は天命六（1621）年から同一一年にかけて、太宗以外の三大ベイレ、すなわち amba beile（次兄ダイシャン daišan）・amin beile（従兄）・manggůltai beile（三兄）とともに公式記録に登場し、また第④例では口頭の報告でもこの形式で言及されている。のみならず、第⑤例では太宗の腹心フルダンの口を介して、アミン＝ベイレから hooge ama と呼びかけられている。こうした子供の名に因んだ呼びかけが独り太宗だけに限定されなかったことは、マングルタイ＝ベイレに関する補足事例⑥⑦の maitari ama beile（マイタリはマングルタイ長子）[13] からも傍証される。かつまた、かかる呼びかけが慣例化していた事実は、hooge ama（beile）の記録回数が五回に達することに徴してほぼ自明に近い。

〔表Ⅲ〕hooge ama beile の用例一覧

満文記事の内容	出　典
①ハンの書を下した。八家の者を集めて言った。……（集まった八家の者は）amba beile［正紅］の hůri, amin beile［鑲藍］の damungga, manggůltai beile［正藍］の wandasi, hooge ama beile［正白］の nomci, dodo (dudu?) age［鑲白］の looca, yoto age［鑲紅］の gumbulu。	『老檔』天命 6 年 12 月 11 日(『原檔』2･p.299) ※八家とはいえ、ハン属下の正鑲両黄旗は除外
②「erdeni baksi は彼のニルの tabsingga が彼を告発したのを、『yasun, unege の二人が唆して告発させた』と hooge ama beile に告げている。……」と yasun, unege がハンに告げたので、……	『老檔』天命 7 年正月 13 日(『原檔』2･p.367)
③ amba beile, hooge ama beile は両紅旗、正白旗を率いて錦州から義州に駐するために行った。	『老檔』天命 7 年 2 月 5 日（『原檔』2・p.415）
④ amba beile の属下の u 備禦が「……漢人一千余人が逃げたと聞いて、我は amin beile のもとの gin 遊撃を呼び寄せて、すべて三十五人を率いて……追って殺した。……それからまた（そのことを知らせに）ハンのもとの lan 備禦、hooge ama beile のもとの mampingga janggin .....に人を遣わした。.....」と訴えるので、 ……	『老檔』天命 11 年 8 月 4 日（『原檔』5･p.60）
⑤ハンの言うには「……さらに太祖が崩御して悲嘆していたところに鑲藍旗の amin beile が furdan を寄越して『hooge ama よ、汝を我は衆ベイレ beise に向かって諮ってハン位に即けよう。……』と遣したので.....」	初纂満文『太宗実録』崇徳 4 年 8 月 26 日辛亥（即位直前を回想した記事）
⑥ maitari ama beile の属下の lio 備禦は罪のある者を勝手に……罪としたり、釈放したりしたので、十五両の贖を取った。	『老檔』天命 7 年 6 月 15 日(『原檔』3･p.143)
⑦ amba beile, maitari ama beile の取った島に船三十艘がおり、三日間監視したが、そのままいる。	『老檔』天命 8 年 7 月 8 日（『原檔』4・p.77）

ところで、「ヘカン」なる呼称が外部へ伝聞した経緯を唯一明確にする〔表Ⅱ〕①によると、明将徐孤臣[14]が後金国の漢人武将劉愛塔（アイタ）（劉興祚）から太祖の死去と太宗の継位を伝え、かつ後金軍の朝鮮侵入を予告する「諺書」を受け取り、この情報を徐孤臣から入手した平安道観察使尹暄が漢城政府に馳啓したことになっている。当時のマンジュ国 - 後金国内部で、太宗に対して日常的に hooge ama beile という言及ないし呼びかけが使

用されていたとすると、この種の表現が劉愛塔[15]によってハングルで音写され、それが「黒還勃烈」として明側へ伝聞した際に、黒還が太宗の個人名であるかのように誤認されたとしても、なんら不思議はない。そうだとすれば、黒還・喝竿・河干とは結局のところ、hooge ama の不正確な漢字音訳に過ぎなかったことになる。前記の李民寏と鄭忠信が hooge ama 由来の呼称を記録しなかったのは、見落としたためというより、恐らくそれが実名ではなく通称であることを理解していたからであろう。

蓋し、三田村・杉山両氏においては、太宗一個人に対する「ホォゲの父 hooge ama」という言及は、単純にありのままの事実として認識されたに過ぎず、だからこそ特段の注意が向けられることもなかったのであろう。しかし、現実には後述するように、「子供の名＋父」は当時のジュシェン - マンジュ人社会において一般的に通用した、個人名に代る対人呼称の一様式と理解すべきものであった。よって、hooge ama は無論、それを音訳した黒還・喝竿・河干が太宗の実名であったはずはなく、やはりホンタイジこそが実名であったと解すべきであろう。先述のごとくモンゴル的慣用では単用しない称号 qong tayiji を、敢えて実名として使用したのは、貴人にこそ相応しいと看做されたからであり、太祖大妃の実名アバハイ abahai（海西ウラ国マンタイ = ハンの娘）が「ハンの娘」を意味するモンゴル語称号 abaqai[16]に由来したのと軌を一にする。なお、〔表Ⅱ〕⑧「喝竿憨」とは、喝竿を個人名と誤認した上に、これにハン号を加えたものであって、もとより実在しない呼称である。

翻って思うに、太宗はいつ頃から hooge ama と呼称されたのであろうか。常識的には長子ホォゲの出生と同時と考えられるが、マンジュ人における子供の命名は出生から多少遅れたらしい。たとえば、ホンタイジの第八子と順治帝の第四子は二歳（以下、年齢はすべて数え年）で夭折したが、命名以前であったため無名である。[17] かたや同じく二歳で夭折したものの、命名が確認される事例も存在する。[18] よって、概ね二歳前後の命名を導き得るとすれば、ホンタイジはホォゲの生まれた己酉年（1609）の翌年（当時一九歳）以降、マングルタイはマイタリが生まれた癸卯年（1603）

の翌年（当時一八歳）以降、それぞれ「ホォゲの父」、「マイタリの父」と呼称されたことになる。〔表Ⅲ〕中、最も晩出の用例⑤・⑦に着目すると、その時点でホォゲ（一八歳）とマイタリ（二一歳）は自己出生時の父と同年齢か、それ以上の年齢に達しており、間違いなく成人であった。[19]「長男の名＋父」形式の呼称は、長男の成人後にも及ぼされたのである。

〔テクノニミー慣行としての「ホォゲの父」〕

「ホォゲの父」・「マイタリの父」とはさしあたり、個人の実名を避けた迂回的な言及、あるいは呼びかけと規定し得る。「子供の名＋父」のような呼称法が社会一般の慣行として普及している場合、文化人類学はこれをテクノニミー teknonymy（子供本位呼称 teknonym による言及 / 呼びかけ）と称する。その具体例としては上記の二例に加えて、『満文老檔』からもう二例を挙示し得る。まず、天命九年四月二二日条[20]に、

> ハン（太祖）が言うには「ドド＝アゲ（ドゥドゥ＝アゲ dudu age の誤）の母 dodo age eniye よ、汝はニカン＝アゲの母 nikan age i eniye をもとどおり恭って暮らせ。我の先の訓言を忘れて自分を彼女と同等にして暮らさぬように。そのようであれば身を誤るぞ。……」

とあり、女性への言及・呼びかけも、実名に加えてテクノニミーに則ったことを知るであろう。ドゥドゥとニカンは太祖長子チュイェンの長子と三子にあたり、それぞれゴロロ氏とイェヘ＝ナラ氏を生母とする。よって、一夫多妻家族の場合、個々の妻は原則として、その実子によって呼び分けられたと見てよい。なお、アゲとはこの場合、太祖の児輩・孫輩に属するマンジュ国 - 後金国宗室男子に対する敬称である。

さらに、『満文老檔』天命八年五月九日条[21]にも、

> ハン（太祖）が言うには「……ジャイサング＝アゲの母 jaisanggů age i eniye が在世の折、我に不遜で我が家に酒宴のために往来する時、

轎に乗って往来した。そのように悪かったので殃が至って死んだ。またチェルゲイの妹であるホォゲの母 cergei non hooge i eniye は、自分の父（エイドゥ = バトゥル eidu baturu）の家に往来する時、アンバ = アゲ amba age（ダイシャン）の門、アジゲ = アゲ ajige age の門を轎に乗ったまま過ぎ、我が門に轎に乗ったまま入ってきた。そのように不遜で悪かったので、殃が至って夫に棄てられた。……」

とある。「ジャイサング = アゲの母」とは、シュルガチ（太祖同母弟）の四娶福晋（第四の正妻）グヴルギャ氏にあたる。一方、「ホォゲの母」は「チェルゲイの妹」が示唆するように、ホォゲ実母の継妃ウラ = ナラ氏ではなく、明らかに嫡母の元妃ニュフル氏を指示する。ホォゲ（1609 年出生）が太宗の長子であったために、ニュフル氏も「ホォゲの母」と称されたのであるが、「チェルゲイの妹」という限定句を冠することでウラ = ナラ氏との混同を避けたのである。ただし、ニュフル氏が「ホォゲの母」と呼ばれた裏面には、以下のような事情もあった。すなわち、ニュフル氏は辛亥（1611）年に太宗第三子ロボホイを産んだので、以後は「ロボホイの母」と称されたはずである。ところが、ロボホイは天命二（1617）年に七歳で夭折したため[22]、これ以降は再び「ホォゲの母」と呼称されたのである。

入関前のジュシェン - マンジュ人社会におけるテクノニミーは、実例そのものが少ないため、これ以上実態を追究する術は残されていない。ただ、さいわいにも入関後に関しては、朝鮮の閔鼎重[23]――康熙八・九年（1669-1670）に冬至正使として漢城・北京間を往還――が当時のマンジュ人について、以下のようなまことに興味深い観察を書き残している。すなわち、閔鼎重『老峰集[24]』巻一〇所収「聞見録」によると、

清人相呼、必挙其子名而呼之、曰「某父」。一如我国郷村之俗。其在公座、貴官之呼管下、亦然。挙此可知其凡事尚未用夏矣。

清人相呼ぶに、必ず其の子の名を挙げて之れを呼び、「某の父」と曰

う。一に我が国の郷村の俗の如し。其の公座に在れども、貴官の管下を呼ぶこと、亦た然り。此れを挙げて知るべし、其の凡そ事に尚お未だ夏を用いざるを。

とある。この決定的な観察によって朝鮮の郷村社会と同様、テクノニミーが当時、マンジュ人一般の慣行であったことが明白であり、[25]「ホォゲの父」「マイタリの父」はなんら例外的事例ではなかったのである。そればかりか、「公座」といった公的な執務の場においても、上官は部下を「某の父」と言及ないし呼びかけたという。たとえ上長であっても、下僚を実名だけで直称することは、敬意を欠く行為と認識されたのである。

今日の文化人類学が教えるところでは、テクノニミーは「ほとんど全大陸にわたって分布しているが、その用法や他の親族制度との関連などはそれぞれの民族の文化的背景や言語慣習によって多岐多様であり、一律に規定することはむずかしい」[26]とされている。である以上、マンジュ人のテクノニミーはマンジュ人固有の社会的文脈から考察する必要があるけれども、今日、漢化以前と以後とを問わず、マンジュ人社会に関する広範かつ詳細な民族誌資料は残念ながら存在しないので、現状では同じツングース系の近縁集団に示唆を求める他ない。

かつて「文化人類学の父」として名高く、またテクノニミーの命名者でもあったタイラー E. B. Tylor は、通文化的手法をもちいてテクノニミーと母方居住や婿タブーとの相関関係を説明しようとした。第二次大戦前から戦後にかけてアメリカ人類学界で活躍したローウィ R. H. Lowie は、上記タイラーの主張を斥けるに際して、その一反証としてラウファー B. Laufer がアムール河下流域で観察した、ツングース系ゴルディ人 Goldi（自称 Nanai・満洲語名称 Heje）における父方居住とテクノニミーの併存を指摘した。[27]ゴルディのテクノニミーを、ラウファーは女性の地位の低さに起因するとし、以下のように述べている。[28]

女性の男性に対する劣位は、妻が夫をその名で呼んではならないと

いう事実に現れている。結婚生活の始まった当初、夫に呼びかけるべき呼称は存在しない。妻が子供を出産すると、彼女は子供の名前によって夫に呼びかける。たとえば、もし彼女の息子が Oisa というなら、夫を Oisa amini、すなわち「Oisa の父」と呼ばねばならない。他の男たちの妻は、男をその本名で呼ぶことを許される。姉妹は兄弟に服従する。姉妹は兄弟を agha（兄弟）と呼ぶが、兄弟は姉妹を本名で呼ぶ。男性は妻の死後、彼女の名前を口にしたり、同じ名前をもつ他の女性に話しかけたりしてはならない。子供は死没した両親の名前を口にすることが禁じられている。

これに対して、シロコゴロフ S. M. Shirokogoroff は北方ツングース（自称エヴェンキ Evenki）について

婦人は夫の名を呼ばないで、親族呼称を用ひるか、又は子供本位呼称（テクノニミー）法によつて呼び、または一般的な呼称、例へば「我が子供たちの父」を用ひる。夫も妻に対して同様の呼び方をする。

と指摘する[29]一方、この一文に施した注記のなかで、ローウィ――正しくはラウファー――の「姉妹と兄弟の関係に関する報告」は説明不十分であるとし、以下のように反論する[30]。

ゴルヂ［Goldi］に於いては、すべてのツングース及び満洲族の場合と同じく、妹が兄を名で呼ぶことは許されないが、弟が姉に話しかけるときにも同じ礼法が行はれるのである。尚ほゴルヂに於いては妻が夫に話しかけるときには、子供の生まれる迄はパリ *pari*（烏蘇里方言）、モダフ *modafu*、ニュアニ *n'uan'i*（アムール方言）［いずれも「夫」を意味する妻からの呼称］などの呼称を用ひ、夫は妻の名を用ひるか、（私の考へでは年下の時）ママ *mama*［「妻」を意味する夫からの呼称］と呼ぶ。子供が生まれると、父親が妻、弟、妹を含む

すべての目下の者から「誰それの父」と呼ばれるのは当然である。といふのは、彼はそれまで「夫」または「兄」アゲ *age* という以外、定まつた名称をもたず、この名称で呼ばれるものは実に多いのだからである。この新しい名称は目上の者が、この男の名を呼ぶことを許されない目下の者と彼について話すときにも用ひられるが、彼等同士の時には相変らずその名を呼ぶ。他人と話すときには彼等は多分この新しい名称を用ひるであろう。何故ならこれは「一層丁寧」であり、その男の社会的名声を揚げることになるからである。ともかく婦人の「蔑視」(ヨーロッパ人の複合の産物) なるものはこの慣習とは無関係である。……([　] 内は引用者)

ゴルディ人に関するこの具体性に富むシロコゴロフの記述を要約すると、下記の三点に帰着するであろう。

①目下や下位世代の親族は礼法上、目上や上位世代のそれを実名で呼ぶことが禁じられる反面、後者は前者を実名で呼ぶことが社会的に許されている。

②男性が子供をもつと、彼を目下や下位世代の親族は「誰それの父」と呼ぶようになるが、目上や上位世代の間では依然として彼の実名を使用してよい。

③ただし、他人との会話において子をもつ男性に言及するとき、目上や上位世代の親族であっても、彼を「誰それの父」と呼ぶのが丁寧とされる。

これら三点に按じて、ゴルディ人のテクノニミーは実名を直称することの忌避というよりは、むしろかつて法学者の穂積陳重(のぶしげ)が命名した「実名敬避[31]」と通底する慣習であって、非親族に関係する③は特にその性格が濃厚である。

以上を要するに、実名ホンタイジを直称する非礼を回避しつつ、これを敬称する間接的な呼びかけが「ホォゲの父」に他ならなかったのである。

注

① 詳しくは G. Stary の下記の論説を参照。

・The Manchu Emperor “Abahai”：Analysis of an Historiographic Mistake, *Central Asiatic Journal* 28-3・4, 1984, pp. 296-299.

・The Problem “Abahai”-HongTaiji：A Definitive Answer to an Old Question? , *Central Asiatic Journal* 43-2, 1999, pp. 259-265.

・An Additional Note on “Abkai Sure”, *Central Asiatic Journal* 44-2, 2000, pp. 301-304.

・News about the“Eternal Mystery” of Hong Taiji：Was Second Manchu Khan’s Name Hailūn—“Otter”? , *Central Asiatic Journal* 50-1, 2006, pp. 116-120.

② 三田村泰助「再び清の太宗の即位事情に就いて」（『東洋史研究』7-1、1942）pp.13-14。三田村氏とは別個に、李光濤「記清太宗皇太極三字称号之由来」（『中央研究院歴史語言研究所集刊』12、1947 →存萃学社『清史論叢』第 2 集、1977 に転載）pp. 222-224 も『李朝実録』仁祖四年の「黒還勃烈」に着目して、黒還をホンタイジの実名と指摘するが、ホンタイジ＝「（太宗が）汗位を奪得した後の自尊自称」であったと結論するのは明らかに誤りである。また陳捷先「釈「皇太極」」（『満洲叢考』国立台湾大学文学院、1963）pp.137-142 はホンタイジを爵号 taiji に hong を冠して専称化したものと説くが、モンゴル語との関連や黒還の存在には論及するところがない。

③ 『瀋陽日乗』（林基中編『燕行録全集』東国大学校出版部、第 19 冊、2001 所収）のこの一条は日付の明記がない。『瀋陽状啓』『瀋陽日記』『瀋館録』に対照すると、チャハル部のエジェイに出嫁した太宗の皇二女マカタ＝ゲゲが夫とともに里帰りしたのを迎えた酒宴に、ハン以下諸王・諸貝勒が列席した際（崇徳三年六月三〇日）の記録と見てよい。

④ いわんや鄭忠信は派遣に先だって、備辺司を通じて光海君から「鄭忠信、洪太主の処に入往すれば、土物を厚贈し、各別（＝特別）に厚待し、必ず歓心を得て、後憂の事を無から俾めよ」（『李朝実録』光海君一三年八月二八日丁酉条）との指示を与えられていた。

⑤ 仁必ら三人が朝鮮語に堪能であったことは、李民寏「進建州聞見録」（『紫巖集』巻二所収）に「当初奴賊以藩胡解我国言語者三人、守直柵中。所謂仁必、乃穏城藩胡、……凡有所聞、必尽誠無隠、密告臣等」とあって明らかである。

⑥ 杉山清彦「ホンタイジ政権論覚書—マンジュのハンから大清国皇帝へ—」（『大

清帝国の形成と八旗制』2015）p. 228。

⑦　同上 pp. 224-225。

⑧　「黒還」をその漢字音からマンジュ語 haihūn（水獺［hailun ともいう］）に比定する Jakhadai Chimeddorji の新説に対して、G. Stary（前掲 2006 年論文 p.118）はさらなる検討が必要であると評しつつも、「ともあれ、haihūn（水獺）よりは Hong Taiji という名称の方が、マンジュ人の耳（に限らず）、およびとりわけ後の時代には、高尚に響いたはずである」と疑念を隠さない。

⑨　たとえば、太祖第四子 tanggůdai（＜tangγudai）、第五子 manggůltai（＜mangγuldai）、第七子 abatai（＜abandai）、第九子 babutai（＜babudai）、ムルハチ（太祖庶弟）次子 darja（＜darjiya）、シュルガチ（太祖同母弟）次子 amin（＜amin「生命」）、第三子 jasaktu（＜jasaγ-tu）、第五子 jaisanggů（＜jaisangγur）、第六子 jirgalang（＜jirγalang「幸福」）などの事例がある。( ) 内は amin・jirγalang を除き、『蒙古源流』*Erdeni-yin tobči* に現れるモンゴル人の人名である。

⑩　F. D. Lessing (ed.), *Mongolian-English Dictionary*, Berkeley and Los Angeles, 1960, p. 986.

⑪　Saγan Secen, *Erdeni- yin tobči*［'Precios Summary'］Ⅰ, A Mongolian Chronicle of 1662（The Urga text transcribed and edited M. Gō, I. de Rachewiltz, J. R. Krueger and B. Ulaan. The Australian National University, Canberra, 1990）によると、たとえば qarγučuγ dügüreng temür qong tayiji（50r27・p. 98）のごとく、必ず個人名を含む先行要素を随伴する。

⑫　同上 92r21・p.182.

⑬　『愛新覚羅宗譜』丁冊・「玉牒之末」p. 85。なお、満文老檔研究会訳註『満文老檔 太祖Ⅲ』附録の人名索引は maitari ama beile を誤ってホンタイジの別名として載録する。

⑭　徐孤臣は『李朝実録』仁祖三（1625）年正月辛酉条によれば、遼東失陥後、一旦は皮島の毛文龍に投じたものの決別し、配下の軍兵五〇名とともに「土窟を鴨（緑）江越辺に作り」、「春は則ち作農し、冬は則ち偵探し」て後金国に抵抗した明軍の参将である。

⑮　田中克己「アイタの伝記―中国官人の一性格―」（『東洋大学紀要』12、1958、pp. 123-130）によれば、劉愛塔は後金建国前の万暦三三（1605）年にヌルハチに投じ、サハリヤン（ダイシャン第三子、1604 年出生）の乳母の娘を娶るほど信任されながら、天聰二（1628）年に叛いて皮島の毛文龍に逃帰する。この経歴からして、劉愛塔は慣例通りに太宗を hooge ama beile と呼んだまでのこ

とで、これを実名と誤認した可能性は低い。

⑯ 『盧龍塞略』倫類門に「官家女児曰‘哈不豁’」、また『北虜風俗』匹配に「（其酋長之）女名‘唖不害’」とあり、前掲 F. D. Lessing の *Mongolian-English Dictionary*, p.3 は abaqai を ‘princess；daughter；young lady’ と解説する。

⑰ 『星源集慶』p. 29・p. 39 参照。

⑱ その実例としては、ムルハチ（太祖異母弟）の第二子ダルチャの次子ダンダリと三子アンダリ、同第三子ウダハイの三子ヘレ、同第五子ハンダイの四子シトゥ、同第九子フシタの一一子イダムなどがある（『愛新覚羅宗譜』丁冊 p. 6527・p. 6640・p. 6935・p. 7220 参照）。

⑲ マンジュ人男子の成人年齢は、婚姻と分財別居の慣習に照らして概ね一五歳ごろであったと考えられる（拙稿「清初マンジュ人の〈分家〉管見」（『アジア史学論集』6、2013、pp. 54-57）。

⑳ 満文老檔研究会訳註『満文老檔Ⅱ 太祖 2』p.762。

㉑ 同上 p. 912。

㉒ 『星源集慶』p. 28。

㉓ 『李朝顕宗実録』によると、閔鼎重を正使とする冬至使は康熙八年一〇月戊寅（一八日）に出発し、翌九年閏二月乙未（八日）に帰着した。

㉔ 『老峰集』は民族文化推進会編『影印標点韓国文集叢刊 129』（1993）所収本を用いた。

㉕ 朝鮮社会のテクノニミーに関しては嶋陸奥彦「韓国人の名前」（上野和夫・森謙二編『名前と社会―名づけの家族史』早稲田大学出版部 1999）pp. 230-233 参照。また、通常のテクノニミーとは別種のそれが入関前のマンジュ人社会に行われたことについては、拙稿「清朝入関前の〈アゲ〉age について―天命期を中心に―」（『立命館文学』582、2004）pp. 15-16 参照。

㉖ 竹村卓二「テクノニミー」（石川栄吉他編『縮刷 文化人類学事典』1994）pp. 500-501。フレイザー J. G. Frazer（永橋卓介訳）『金枝篇（二）』1941、pp. 190-202 は実名使用のタブーが部分的に呪術的な悪用への恐怖に起因したと説くが、マンジュ人には直接適用できないようである。なお、「名前」全般をめぐる観念・慣習については G. Foucart, “Names（Primitive）”, James Hastings (ed.), *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, vol.9, New York, 1917, pp. 130-131 も参照。

㉗ ローウィ R . H. Lowie（河村只雄初訳 1939・河村望改訳 1979）『原始社会』（*Primitive Society*, New York, 1920）pp. 118-120。

㉘ B. Laufer, Preliminary Notes on Explorations among the Amoor Tribes,

American Anthropologist, vol.2, 1900, p. 320.

㉙　S. M. シロコゴロフ（川久保悌郎・田中克己訳）『北方ツングースの社会構成』1941（*Social Organization of the Northern Tungus,* Shanghai, 1933）p. 519。

㉚　同上 pp. 538-539［註（16）］。

㉛　穂積陳重『忌み名の研究』1992（『実名敬避俗研究』1926 の校訂版）pp. 186-237。穂積陳重（1855-1926）は徹底した実証主義と豊かな文化人類学的発想を両立させたことで知られる法学者である。

（本学非常勤講師）